教育現場を通じてスポーツ離れを解決

伊藤妃花　赤松遼音　金澤勇仁　板尾拳太
平田桜子　劉茉柔　　指導者：堀内秀嗣

研究の背景

H29と比べてR4では『スポーツをするのも見るのも嫌い』という愛媛県の児童・生徒が12.5%増加している。（県民のスポーツに関する意識調査より）そのような人たちを「する」だけでなく、「見る」、「支える」という立場でもスポーツに関わる人を増やし、スポーツ離れを解決したい。

研究の仮説

・スポーツが好きな理由は得意、嫌いな理由は苦手ではないか。《好き＝得意》《嫌い=苦手》

・教育現場を活用して３つの間（仲間、時間、空間）を充実させ「見る」「支える」ことからスポーツに関わるようにすることで、関心を少しずつ高め、スポーツ離れを解決できるのではないか。

研究方法

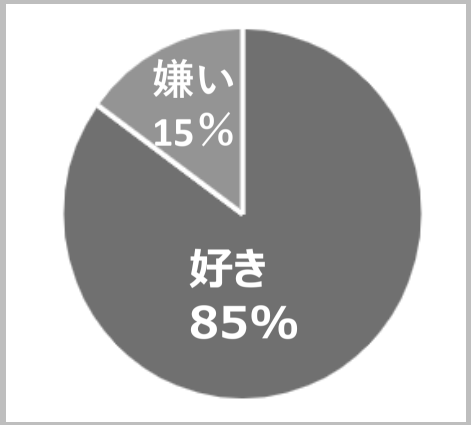
・近隣の小学校や、幅広い年齢層の方にスポーツに関するアンケート、話を聞く

・外国と日本のスポーツに関する違いなどを比較する
↓現状を分析し、特に人生でスポーツに関わる機会がどうなるかを左右される時期であると考えられる現在の小学生の情報を比較しデータ化する

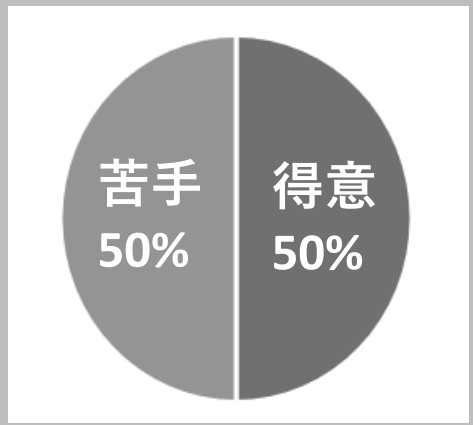
結果

宇東生へのアンケート結果
（対象者：全校生徒　回答者１００人）

Q1.スポーツが好きか、嫌いか



Q2.スポーツが得意か、苦手か



まとめ

実施時期：令和5年12月

宇東生にアンケートを取った。スポーツの好き嫌いについて好きが85%、嫌いが15%となった。しかし、得意苦手については50%ずつとなった。先生（回答数4人）もアンケートを取った結果、好きが75%、嫌いが25%となった。しかし、全員が苦手と答えた。このアンケート結果によりスポーツの好き嫌いと得意苦手は異なることが分かった。

今後の課題

・親世代や小学生への調査を実施し、全国調査や県・市のデータと比較・検証する。
・スポーツ離れを解決するための方法を模索し、地域の教育現場へ提案する。